

考える。動く。自由になる。

工藤勇一さんの『考える。動く。自由になる。』(2023年3月15日初版第1刷発行)、タイトルと著者名に惹かれ、読みました。「『考えて動くこと』即ち『自由になること』と文字どおりに解し、「そのとおり」と思ったわけです。著者の工藤さんですが、私と同じ1960年生まれ、現在は、横浜創英中学・高等学校長ですが、2014年に千代田区立麹町中学校長となり、宿題廃止、定期テスト廃止、固定担任制廃止などの教育改革を実行、2018年12月に出した『学校の「当たり前」をやめた』は10万部を超えるベストセラーとなりました。

さて、読み始めて、まず引っかけたのがマルコム・グラッドウェルというカナダ人ジャーナリストが書いた『天才!成功する人々の法則』の紹介で、それによれば、一流のミュージシャンやアスリート、技術者たちは専門性を高めるために1万時間を練習や訓練に費やしていたそうです。1万時間の具体のイメージとして、「1日3時間×365日×10年=1万950時間」が示されています。(布川)だから、耳にタコではありますが、大学合格をゴールにしない。大学入学をスタートにする。そういう能力の土台を高校時代に作ろうということです。

かつての私(布川)には、「なりたい自分」はあっても、そういう自分になるための行動計画はなく、とりあえずの「小さな一歩」もありませんでした。ですから、皆さんには、【細かな行動計画が立てられないならば、「なりたい自分」を大きく描いて、「小さな一歩」を踏み出そう。さすれば、「なりたい自分」への道筋が少しずつ見えてくる。】と言いました。

工藤さんは、「なりたい自分」を考えること自体の難しさを指摘しています。「自分を哲学する土台」が必要だと。そして、その土台を「自律」とし、「自律」を「自分で考え、判断し、決定し、行動すること」と定義します。「自己決定し、行動すること」を繰り返すことで、「自律した人」に成長する。生徒の相談には積極的に乗りますが、積極的なアドバイスはしません。よく言われる「答はあなた自身の中にある」と同じことです。ですから、メタ認知能力が重要になります。メタ認知とは、客観的に自分を眺めること。もう一人の自分が、頭の斜め上から自身の考えや行動を観察しているイメージです。(布川)メタ認知能力の鍛え方は記されていませんが、「自己決定し、行動すること」を繰り返すことでしょう。自律とメタ認知はつながっています。(著者は、自己決定を促す一方で、専門的な問題に直面したら、「解決方法そのものを教えてくれそうな人」を選んで相談することを奨めています。その方が合理的だからです。)(布川)とにかく何かを始めよう。手と足を使って考えよう。考えたら行動しよう。行動したら考えよう。

日本は、「ものごとを人のせいにする社会」だと断じます。「当事者意識」「自分ごと意識」が必要です。これも「自律」と同じ。「自己決定し、行動すること」です。当事者意識を持って社会参画しますが、社会は「人の集まり」です。そこには、「対立」があります。だから、「対話」が必要だと。そして、「対話」の目的を【「感情」と「理性」を分けて、「全員がOK」と言える取り組み方を見つけ出すこと】とします。「対話」を成立させるためには、「最上位の目標」を決めなければなりません。これが決まれば、「お互いに譲り合えるポイント」を探って

いく「対話」が成立します。進め方のポイントは二つ。「感情を優先させない」「上位の目標（優先順位の高い目標）を忘れない」（（布川）「最上位の目標」実現のための高次の譲歩はレベルを落とす妥協とは違います。）

対話のスキルとして、ファクトチェック（事実なのかどうかを確かめること）の重要性を説きます。「情報の出どころ」と「情報の具体性（5W1H）」はクリティカルな私としては当然のことですが、「情報の目的（なぜ、この情報が作られたのか）」もチェックするそうです。（私の教え子で、本校HPに掲載されているシンフォニーの愛読者がいます。第16号の「クリティカル」を読んだその方は、早速、連絡をくれ、曰く、「当時、ふっくんから『それは何故?』と事あるごとに聞かれたことを思い出した。」と。）（著者は、「高校生くらいのころから」「あらゆるものを疑って考えることが好き」になっていたそうです。）

テーマは「民主主義」にも及びます。「民主主義とは、可能なかぎり個々人の自由を尊重しながら、すべての人々の幸せを実現するという、簡単には両立できない答えを全員の対話を通して探し出し、合意し、実現していくこと」だと。当然のことですが、民主主義は「対話」です。そして、学校は民主主義を、対話を学ぶ場だと続きます。（（布川）さらに、「多数決は民主主義じゃない」と続きますが、これ、私も昔からよく言います。多数派A派のA案と少数派B派のB案で多数決を取ればA案に決まります。そうではなくて、「最上位の目標」を決め、『対話』により、それを実現するための高次の第三案、妥協案ではない高次の第三案で合意するのが民主主義です。）

「誰とでも仲良く」とか「友だちたくさん」とかはくだらない。ただ、誰とでも話せるスキルは重要だと。「異質な人との対話は本を読むことに似ている」し、誰とでも話すことで対話スキルが向上すると。そして、人間関係がうまくいくコツは、「自分と相手は違うんだ」と知ることだとしています。（（布川）私は個人主義者です。他者尊重、利他主義、民主主義の前提は個人主義だという考え方で

す。）
そして、17号で扱ったコンピテンシー。コンピテンシーとは、「行動、経験を積み重ねて身につけた再現性の高い力」のことです。このコンピテンシーを「面接」でどう見るか。「志望の動機」「過去の経験」「今後の希望」、この3つを論理的に関連付けて、一つのストーリーとして語れる方は、コンピテンシーが高いということです。（（布川）私は口がうまいとか文章がうまいとかいうのを信じていません。わかっているか否かです。わかっているれば話せるし、わかっているれば書けます。なので、ここでいうストーリーとは経験についての自己認識・自己理解のことであり、第2号・第3号で扱った「面接力」と考え方は同じです。「志望の動機」「過去の経験」「今後の希望」、第2号・第3号では「自己紹介」「志望動機」ですが、同じことです。これが一つのストーリーになるまで高まれば、コンピテンシーも高まったということですが、どんなに自己認識・自己理解を深めても「過去の経験」の絶対量は変わりません。「70の経験」を70の認識・理解まで高めるか、50程度の認識・理解でとどまってしまうか。いずれにしても、70が限界です。ですから、経験値を80、90に高めましょう。三兎、四兎を追う相乗効果です。）経験を通じて身につけた力は、その後の人生で何度も繰り返し発揮することができます。しかも、繰り返せば繰り返すほど、その力は強くなっていきます。考えて、動いて、考えて、コンピテンシー（行動、経験を積み重ねて身につけた再現性の高い力）を高めましょう。
.....

工藤さんが宿題をやめた理由、紙幅の関係で工藤さんの言葉は割愛しますが、要は、「宿題とは書ける漢字を書き続けるようなもの。できないことができるようにはならない。」ということです。本校は、意味のある宿題を出します。

そして、受験生。最後の最後まで、「できないことを減らす」「できることを増やす」意図的な勉強を続けてください。大丈夫。自分を信じて。必ずうまく行きます。